

## 第 2 回高等学校の数学・理科にわたる探究的科目の在り方に関する特別チームについて

2016 年 1 月 21 日に中央教育審議会教育課程部会の高等学校の数学・理科にわたる探究的科目の在り方に関する特別チームが開催された。

15:00 から 17:00 まで文部科学省 3 階 1 特別会議室で行われた。

一般傍聴者は高等学校のみが対象となっているためか、これまでのワーキンググループよりはやや少なめで 20 名～30 名程度であった。

この特別チームは高等学校における数学と理科を統合した探究活動を行なう新科目「数理探究（仮称）」に関する審議を行なう。

最初に、全教科に関する事項として他ワーキンググループでの検討事項が報告された。

まず、特別支援教育部会では、これまで総則だけであった障害児に対する配慮の記述を各教科においても記すことなどが示された。

次に、情報ワーキンググループでは、情報の教科だけではなく、その他教科においても ICT を活用すること、またその活用例について検討してほしいと伝えられた。

最後に、体育・保健体育、健康、安全ワーキンググループからは、防災・食育などについて教科横断的に取り扱うことなどが示された。

15:15 頃から事務局より資料についての説明があった。

探究的な科目としては SSH（スーパーサイエンスハイスクール）が先行的にその科目を実施しており、その取り組みの調査結果が示された。理数科目に対する意欲の向上や大学院の進学率の向上に成果が上がっているようだ。

現行科目としては「数学活用」と「理科課題研究」があるが、どちらも開設率が非常に低い。それを踏まえて、新科目は「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」で実施科目とするよう提言されている。単に、内容の統合だけではなく、科目の理念としての骨組みを通し、育成すべき資質・能力を整理していきたいとのことであった。

科目固有の視点として「挑戦性」「総合性」「融合性」「国際性」「感性や多様性に支えられた質の高いアイデアの創発」が案として挙げられた。

この後、15:45 頃より意見交換が開始された。

まずは教科の理念を検討することが議題であったが、SSH として取り組んでいる高校の立場から実現可能性に対する危惧があるとの意見が出た。

課題研究を行なうには多大な予算と教師の労力、学外からの協力が欠かせず、SSH が各地域のトップ校であることも考慮すると、多くの一般の高校で実施するのは大変難しい。ただし、指導のノウハウはある程度蓄積されてきている。また、課題を発見するだけでもハ

一ドルが高く、目標を高く掲げない方がよいとの意見を述べる委員もいた。その他、現状ではカリキュラムがいっぱいで新しく科目を追加するには時間的制約があるので、内容が重複する部分の大きい総合的学習と代替すべきだとの意見もあった。また、受験勉強への影響から時間のかかる探究活動への保護者の理解が得られない実情から、その成果がA0入試などで採用されるべきだとの意見もあった。

このように理念を検討する以前に、その実現可能性を危惧する委員は多くみられた。

目標・理念に関しては、「自分の手でやってみる」「知的好奇心を刺激して高める」などの案が出された。

理念だけを先に議論しても、実現方法等について具体的なイメージがなければ理想論と現実論で乖離してしまうという不安から、次回以降はその両面から議論することとなった。

次回は3月1日（火）17時より開催予定である。